
東方幻想人類

神尾そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想人類

【Nコード】

N1348Q

【作者名】

神尾そら

【あらすじ】

こんな人間の里は妖怪に食われない。半獣、先代巫女etc
オリキャラも交えた東方Project二次創作です。

キャラ設定

○花屋の娘

冴月^{さつき} 麟^{りん}

R i n S a t s u k i

種族：獣人^{ワーカー}

能力：酔うと麒麟になる程度の能力

人間の里にある花屋の娘。稗田阿求とは友人。
と言ってもただの人間ではなく「麒麟」という妖怪が混じっている。

幻想郷において獣人とは妖怪の一種と分類されているが、獣人は人間に友好的な者も多い。

麟も人間を襲う事はまずない。

そもそも人間を襲えば村八分に合うのが分かってるのでやらない。

そんな殆ど人間と変わらない麟が完全に妖怪化するのはお酒を呑んだ時である。

しかも当代の巫女、霊夢は誰にでも平等なので人間に友好的であろうとなかろうと退治する。

人間の味方寄りである獣人にはいい迷惑であるって彼女が通う寺小屋の慧音先生が言ってた。

○博麗の先代な巫女

霧雨 きりさめ 沙夜 さよ

S a y o K i r i s a m e

種族：人間

能力：靈氣を操る程度有能力

博麗靈夢の先代にあたる博麗の巫女。旧姓博麗沙夜。

かつて幻想郷の外の世界で虐待されていた少女が居た。

幼いながらこの世に絶望した少女は、アパートから飛び降り自殺を図ろうとした。

だが、その時空間の「スキマ」から白い手が伸びるのを見た。

スキマの白い手を掴んだ少女は幻想入りし、妖怪の山に流れ着く。

天狗の酒の肴にされそうだった少女だったが、運よく「博麗の巫女」として育てられる事になった。

博麗の巫女は天狗が攫って来て幻想郷の秩序と結界を守るべく育てる。

妖怪同士で大きなもめ事を起こしたがらなかった。妖怪達は人間よりも現実的で平和的だったのだ。

そこで人間に「妖怪退治」させるのは天狗の知恵だったのだ。

少女は山に住む自称仙人の茨華仙の稽古を受けてすくすくと育った。

博麗の巫女としての技術を身につけ、天狗の身内でありつつも妖怪退治を行う巫女として。

そんな少女が出会ったのが人間の里の大手道具屋霧雨店の後継

ぎの少年だった。

少女は霧雨家の少年に惹かれ、嫁入りする事を決意する。
そして生まれた子供は魔理沙と名付けられた。

現在は嫁入りした霧雨店の経営を手伝いつつ霊夢が行わない「
巫女らしい仕事」を請け負ったりする。

スペルカードルールが制定される前からの妖怪退治を行っていたので弾幕の当たり判定に慣れていない。

その代わり百戦錬磨である事は確かであり、そこら辺の妖怪では相手にならない。

ただ彼女が引退した理由も「時代が変わった」という事を自覚しているのだろう。

命を奪う事を目的としない遊びについていけるような年齢ではないのだ。

そして、現在の幻想郷の尊さを知っている人間の一人でもある。

霊夢とは彼女が幼いころからの知り合い。

魔理沙は実の母娘だが数年前に博麗の巫女絡みのごたごたで勘
当中。

「人里の望楼にて」

人間の里は周囲を城壁で囲まれており、出入り口は門しかない。その門の高部には藁の屋根がかぶされた望楼がある。

この年代物で古めかしい望楼は、かつてはこの望楼から襲撃してくる妖怪達を見渡していたのだろう。

妖怪と人間が食うか退治されるかの戦いに明け暮れていた頃の遺物だ。

だがそれも昔の話。

今はこの望楼も歴史を物語るだけの遺物と化しつつあった。

それは何故なのか。とそんなお話である。

この望楼には誰も見張りなど居ない。

だからここに二人の少女が忍び込んできても、誰も文句を言わない。

「カビ臭いですね……」

忍び込んできた内の一人、稗田阿求はその望楼の惨状を見て素直にそう呟いた。

埃にまみれ、蜘蛛の巣もちらほら見える。

本当に誰も掃除していないのだ。

その穢さはここから新たな妖怪が誕生しそうなくらいである。

阿求と共に楼閣に忍びこんできた少女は呟く。

「それでも悪戯には結構使われるんだよ。ここにも妖精とか住みついているのかもね」

阿求を誘ってわざわざこんな所まで連れてきたのも冴月の陰謀だ。彼女は実は半獣だが、それはどうでもいい事柄である。

「妖精は弱いくせに数だけはいですから」

「きつと妖精から見た人間は物凄く強いんだよ。妖精同士の喧嘩も、本人達からすれば大戦争とか」

「光の三バカ妖精と氷のバカ妖精が喧嘩してるのを私も見ました。正直、そんな大した弾幕じゃなかったですよ」。

阿求は光の妖精と氷の妖精の喧嘩を大した事のない弾幕という。だが彼女らも妖精の中ではそれなりに力を持つてる方だ。それでも下級妖怪に匹敵するくらいなのだ。

どちらかと言えば妖精達をザコ扱い出来る阿求ら幻想郷の人間の方が、人間離れしている。

そう、幻想郷の人間はみんな強いのだ。妖怪に負けないくらい。だからこそ幻想郷は楽園なのだ。

「ねえ、阿求ちゃん。昔はここが妖怪退治の拠点だったの？」

「そうなるね。麟は人間の里がどうして生まれたか知ってる？」

「なんで出来たの？」

「妖怪が山の麓まで下りて来ないように迎撃する為の妖怪退治屋が住む里だったのです。私達の多くはその妖怪退治屋の子孫ですね」

「でも外から来る人間も結構居るじゃん」

「幻想郷は全てを受け入れる。それが妖怪の賢者の理想なのですよ」

「あの賢者って複数名義じゃなかったの？」

「いやまあその……」

実の所、人間の里は妖怪達と上手くやっていけている。

人間に友好的な妖怪や神様、仙人の類も増えてきたし、本来の敵である妖怪達も大半は平和ボケしているような連中ばかりである。

その辺の弱小妖怪なら普通に相手に出来る人間も多く、強い妖怪が起こす異変にしても彼らにとっては自然災害と大して変わらない。

「紫様は恐らく影で幻想郷が減びないか調整しているのですよ。多分」

「人口調整？」

「いや幻想入りする危険物とかそんなの」

人間と妖怪の新しい関係。それは妖怪が闊歩する現在の博麗神社を中心とした界隈のみならず、こうした人間の里にも存在する。

それはつまり遠くから攻めてくる敵を偵察して迎撃する為の楼閣

の存在意義を失った事でもある。

だが阿求は恐らくそんな現在の幻想郷が好きなのだ。
過去がどれだけ陰惨であつたにしろ、現在はそれを引きずっていない訳ではない。

懐古はしても過去に縛られて現在や未来を見ない事はしないのだ。

阿求が思いにふけてた横で麟は突然大声をあげた。

「あ、本読み妖怪だ。撃っちゃえ」

麟は朱鷺色の羽根を持った名無し妖怪に向けてシヨットを放つ。
これも先祖代々伝わる退魔の術なのか。はたまた半獣だからかは知らない。

「ぎゃあ！」

本を読んでいた名無し妖怪は麟の奇襲に驚いたらしい。
まさか楼閣から攻撃を放たれるとは思っていなかったのだろう。

「なるほど。楼閣の使い方はこうなのか」

麟は物思いにふけりながらそんな事を呟く。
ちなみに麟が名無し妖怪に攻撃を放った理由は特にない。ただ通りすがったから襲っただけである。

「麟・・・あまり調子に乗らない方が・・・」

いいですよ、と阿求が言おうとしたら名無し妖怪が背中からバツ

クシヨットを放って来た。

「きゃんっ！」

ピチューンという効果音が鳴った。思わず不意打ちで避け損ねたのだ。

「何やらかしてくれてんのよ。そんな所から撃って来るなんて効いてないわよ！」

名無し妖怪が怒りの表情を浮かべながらこちらに近づいてきた。

「いやー。なんとなく横切ってる妖怪が居たら退治しとくのが道理って幻想リテラシって奴じゃない？」

「どこの巫女よ、それ！」

麟と名無し妖怪が一触即発な雰囲気である。

どうせこのままスペルカード戦へ突入するのだろう。

だが弾幕の余波がこの楼閣まで及びかねない。

つまり里の門へ被害が及びかねない。

妖怪からしても里を襲うのはリスクな行為だ。

というかそれやったら確実に博麗の巫女あたりによって袋叩きに合う。

強い妖怪は我儘だったり掴み所のない妖怪が多い一方で異変以外では自重出来る。

だが弱い妖怪はその限りではない。

地底の地獄鴉などの例外を除けば、弱い妖怪は頭の弱い奴が多い。だが頭の弱い奴は大抵弱い。

とどのつまりここでスペルカード戦が起こるのは名無し妖怪によっても不利益なのだ。巫女によるフルボッコフラグである。

「あ、戦うなら他所でやった方が・・・」

いいですよ、と阿求が言おうとした時、既に遅かった。

「とりあえず勝負よ！とんこつラーメンに添えられるシヨウガのようになれ！」

「私のバックショットの前に死ぬが良い！」

「あーあ・・・」

阿求には麟と名無し妖怪の弾幕戦闘の被害に遭わないよう、とつとつその場から離れる事しか出来なかった。

まあこの辺で戦っても大丈夫だろう。

これくらいで崩れるほど妖怪退治屋の末裔である人里の住人はやわくない。

勿論決着がついた後、二人とも巫女にボコボコにされたのは言うまでもない。

後日。麟がこんな事を聞いてきた。

「ねえ、なんで霊夢ちゃん。私もボコるん？」

「人間と妖怪には魂を入れる器しか違いがないからですよ」

「みんなの幻想郷縁起」

1・幽香さんの幻想郷縁起

第二百二十二季、正月。

人間の里にある稗田家。

この家の当主である稗田阿求は、何とか幻想郷縁起も去年中に出す事に安堵していた。

本来なら夏に出る予定だったのが、完成が遅れて最終的には年末になったり

正式に発表される一週間ほど前に一部で完成品の内容が流れてたりと、色々あったが一安心である。

幻想郷縁起の完成が遅れた理由は、人妖の絵を書くのに苦労したとか、そういう話があるが、その辺については阿求は触れようとしなかった。

気にしたら負けだ。

のんびりと阿求が紅茶を啜っていた所で、阿求の部屋に稗田家の使用人が入ってきた。

「阿求様。お客様がお見えになりましたが……」

「お客様……。誰かしら？」

「花屋の娘の方です」

花屋の娘は紅茶を啜りながら、阿求とテーブルを挟んで向かい合っていた。

「ねえ、阿求ちゃん。あの本見たけど、何で私の項目がないの？」

「うーん。冴月は、別に妖怪退治とか積極的にしてるって訳でもないからかな？ ほら、今の人間の里って強い妖怪が襲ってくる事ないじゃない」

「紅霧異変の時は吸血鬼を退治しに行こうと思ってたよ。結局、行かなかったけど」

「結局、行かなかったからね」

阿求は、テーブルの向こう側に座っている花屋の娘を一瞥してから、飲みかけの温くなった紅茶を飲み干した。

確かに阿求の眼の前に居る少女は、本当に”人間の中では”強い方に入るとは思う。

多少の戦闘力スペックの差を無視出来るスペルカードルールの上においては、吸血鬼が相手でも勝利する可能性もある。

ただこの少女、人間の里から、余り外へ出ないのである。そこが博麗の巫女らとは大きく違う。

花屋の一人娘であり、阿求と同年代でもあるこの少女の名前は、冴月 麟と呼ぶ。

スペルカード”花符””風符”を自由に扱うらしいが、人間の里

から余り出ない為、発揮する機会が無く、どこまでが本当かは不明である。

「ほら、幻想郷縁起は、どっちかって言うと妖怪がメインだし。人間は妖怪退治の英雄という事で掲載してるから」

「でも竹林の向こうにある永遠亭の輝夜さんについては掲載してるよね。あの人、引きこもりのダメ人間だって話だよ。英雄じゃないよ」

「誰から聞いたの？ それ」

「竹林に住んでる健康マニアの焼鳥屋さんから」

冴月は、床に寝転がって幻想郷縁起を読んでいた。
完全に友人の家に遊びに来た子供である。

「そっぴゃさ、阿求ちゃん。私だけじゃなくて博麗神社に取り憑いてた悪霊とか、巫女さんが乗ってた亀とかも載ってないね」

「ああ、そっぴゃ九代目になってから見てないね。昔は居たけど今はどうなのかな。目撃談を聞かないし、別にいいやと思ってたからね」

「でも霊夢ちゃんが里に買い物に来た時、”玄爺は神社の横の池でボケてる”とか言ってたよ」

「まっ、長生きしてるしね。あの亀」

「あと幽香ちゃんの欄の危険度・人間友好度が、こんなに高いのはちよっとおかしくない？ あの妖怪さん、私んちの花屋にもよく来るけど、そんなに怖くないよ？」

「まあ色々あったのよ。本当に色々と」

元々、風見幽香の欄は、せいぜい「危険度・中、人間友好度・普通」くらいになるはずだった。

確かに彼女の戦闘力は凄まじい物があるが、彼女は弱い存在に余り興味を持たない。

喧嘩さえ売らなければ普通の人間が襲われる事はまず無いのだ。

しかし、幽香は少々見栄っ張りだった。

第二百一十一季。

この頃の阿求は、幻想郷縁起の執筆に精を出していた。
そんな夏のある日の事である。

「阿求様！ お客様がお見えになりましたが……」

「お客様……。誰かしら？」

「それが……。妖怪の方という事で……」

訪問してきた妖怪、風見幽香は阿求の部屋に入るなり、幻想郷縁起の自分の欄を読んでいた。

最初はにこやかだった幽香の表情が、どんどん不愉快を感じている形相へと変わっていく。

「何よ、これは」

「何よ、と申されましても……」

「生意気だわ。これじゃ、私がみんなのお友達みたいじゃないの。人間も妖怪も虐めるのが私の日課なのに！」

変なベクトルで怒りを感じているようだが、その辺は人間じゃない者の思考回路という事で置いておく。

とりあえず、これ以上、怒らせない方が良さだろう。

「じゃあ、適当に訂正して行かれても構いません。後は好きな様に」

「あらそう？　じゃあ、そうさせてもらおうかしら」

そして、幽香は筆を取ると幻想郷縁起の内容を書き換えていった。

「危険度は極大。人間友好度は、最悪とかいう項目作っちゃえ。巫女が私を退治した、という話は眉唾…… これでよし」

そして話は、約半年後の現在へと戻る。

冴月は幻想郷縁起を読み終えて、再びテーブルを挟んで阿求と向かい合っていた。

「でも、この幻想郷縁起を見れば、今の幻想郷が平和だって事が分かるよね。外の世界から来た人に見せたらビックリされたよ」

「人食いを忌み嫌う風習が日本人にはあるしね。まあ人間が死んだら妖怪も困るから襲われないというのも大きいけど」

「里にも妖怪退治をする人間とかも居るしね。私とか」

「今年は大きな異変が起こりそうだしねえ。次も博麗の巫女や魔法使いが動くんだろうけど、それに乘じて異変解決とかしてみたら？」

「考えとく」

去年は妖怪が静かだった所為もあって、今年は大きな異変が起こりそうだが、その時は冴月も異変解決に乗り出すのかもしれない。

「冴月 麟」という同姓同名の妖怪が現れるのかもしれない、が、その可能性は置いておく。

今年はどんな異変が起こるのだろうか。

香霖堂の店主が河童河童言ってる辺り、彼は河童と人間のハーフとかいう噂が流れてるが、それと関係があるのだろうか。

一方その頃。

博麗神社の湖。

日傘を差している妖怪の少女が、湖の中を見やる。
そこから一体の亀が、ひょっこりと現れた。

「ふおっふおっふお。久しぶりですよ、幽香殿」

「お久しぶり〜、でアンタ誰だっけ？ 亀って事は河童？」

「河童、だとしたらどうなされるおつもりですか？」

「そりゃあ、今回で大きな異変を起こす黒幕とかいう事を考えてみたりとかかしら？」

その瞬間、幽香は玄爺の口元が歪んだのを見逃さなかった。

玄爺は河童なのか。

今年に大きな異変を起こすのか。

霊夢に食われずにすむのか。

風雲急を告げる事態。

一体、どうなってしまうのか！？

（多分関係ない）

オチないまま終わる。

2・橙さんと藍さんの幻想郷縁起

第二百二十二季、正月。

幻想郷にある人間の里。

「ふわぁゝあ。眠う……」

花屋の一人娘である冴月麟は、朝早くに起きて、眠気を堪えながら花壇で仕事をしていた。

冴月の実家は、自家栽培で売り物の花を育てている。中には妖怪対策になる花もあるから侮れない。

そうやって仕事をしている冴月に、声をかけてくる者も多い。
と言っても、それは人間に限らない。

「おつ。朝から精が出るじゃないか」

買い物力ゴを持った金髪の女性。

特徴的なのは、長い尻尾が九つも生えている事。

明らかに人間ではない存在である。化け狐の妖怪である。

「はい、おはようございます」

化け狐の女性に冴月は、目上の人物に接するように頭をペコリと
下げて挨拶をした。

妖獣というのは、強力な力を持つ者ほど尻尾の長さで数が増えるが
明らかに九つの尻尾というのは、並大抵の物ではない。長さもか
なり長い。

出来れば人間の里で荒事を起こさない方が被害が少なくてよい。
幸い力の強い妖怪ほど、頭が良い傾向になるので里を襲ってまで
人間を食おうとする者はそんなに居ない。

「お買い物ですか？」

「ああ、ここの豆腐屋の油揚げは人間が作ったには中タイケル
のどね。たまに買い物に来る事があるのよ」

「そうですか」

ある程度、賢くなってくると泥棒行為を恥じる物だが、それは妖
獣も同じらしい。

化け狐の女性は、もう一度頭を下げると再び歩いて行った。
空を飛ばばいいのだが、それをやるのは淑女的ではない。

「うう。寒っ……」

一通り仕事をやりおえて、冴月が自宅の中へ戻ってきた。
既に両親は仕事で外へ出ていて、花屋の家には冴月が一人しか居ない。

「さて、冬は炬燵で丸くなるっ」と

冴月は、炬燵のある部屋へ向かい、その中へ潜り込もうとした。
しかし、その中には先客が居た。

「ありゃ？」

家には、冴月以外にも誰も居ないはずだ。
だが、その中には確かに人間ほどの大きさの先客が居た。

「猫ちゃんが、炬燵で丸くなってるよ」

炬燵の中に居たのは、猫の妖獣である化け猫だった。

「うーん。そういう迷信を信じちゃダメ！」

「迷信じゃ無いじゃない」

「猫は炬燵で丸くなる」

化け猫は、そう言っで炬燵の中で再び丸くなり始めた。

「そんなことより！ とつとつ、そこを出てよ。追い出しちゃうよ、猫ちゃん」

そう言っで抗戦の姿勢を見せる冴月に対して、化け猫はからからと笑った。

「人間が？ 私を？ 無理無理、あんたみたいなのが私にたてつこうなんて」

「試して欲しいのね」

そして即座に冴月は、スペルカードを懐から取り出した。対する化け猫も、野生の勘で臨戦準備を整える。

使用するカードは、両者とも一枚。速攻の構えである。

先にカードを宣言したのは、冴月の方だった。

「花符「マタタビラクトン」！」

冴月がスペルカードを宣言したと同時に、弾幕が飛び散る。一つ一つが、ワインダーを形成している、それは正に花火。そして、その弾の正体はマタタビだった。

「あつ。あいー！！」

化け猫は、マタタビを見ると眼の色を変えて弾へと自ら突っ込んでいく。

そしてマタタビ弾を咥えた瞬間。

「きゃー」

ピチューン、という乾いた音が鳴り響く。

同時に化け猫は酔っ払って、マタタビを食べるでもかじるでもなく、しゃぶり始めた。

「これぞ猫専用スペルカード。ちっと公平じゃない気もするけど、まあいいか」

冴月は、一心不乱にマタタビをしゃぶってる化け猫の襟首を掴むと、玄關まで引きずって行き、そのまま外へたたき出した。

「これで妖怪退治終了つと。さて、弾幕ごっこで身体も暖まった事だし、阿求ちゃんちにでも遊びに行こうかしら」

「ふむ。今日も、結界の調子は万端だな……」

先ほど冴月が挨拶した化け狐の女性は、一旦、自宅へ荷物を置いた後、また人間の里へやって来ていた。

と言っても別に人間を食べるつもりは無い。

結界の修復しており、そして今やり終えていた所だった。

「今頃、紫様も外の世界であの方と楽しくやりながら、人間を幻想郷まで連れ込んでいる所ね」

式神でもある彼女は、主の代わりに結界のチェックを行ったりもしている。

例えば人間は知らなくても、彼女自身は主人の多忙を知っている。だからこそ、こういう雑用は自分がやらないと行けないと思っていた。

「んっ？ この匂い……、まさか橙か？」

そして仕事も終わったんで自宅へ帰ろうとした時、彼女は妖獣の嗅覚で嗅ぎ慣れた匂いを探り取った。

式にして式を打つ化け狐。その彼女の式の匂いである。

彼女は、妖獣の中でも最強クラスの身体能力を生かして、その匂いの元へ飛んでいった。

その元には、マタタビをしゃぶっている化け猫、橙の姿があった。

「あいー、藍さまー」

「おおっ、橙。人間にマタタビを投げられたのかい？ 寒かっただろっ」

橙は、寒い中、酔っ払ったようにマタタビにむしゃぶりついていた。

当然だが、人間も余り関わりたくないらしい。

「うみゃー」

化け狐、藍は、橙の様子から人間に逆襲してやりたいという気概を読み取った。

それが本当に橙の意思かどうかは知らない。

「本来なら、私も一緒に逆襲を手伝ってやりたいんだが、ダメなんだ。私がこの人間に手を出したら紫様に怒られてしまうんだ。分かっておくれ、橙」

「にゃはー」

「おお、そうか。ウチに遊びに来たいか、ようしいだろう。ただ、紫様に迷惑かけちゃいけないぞお」

藍は、橙の様子から八雲家へ遊びに来たいという気持ちを読み取った。

それが本当に橙の意思かどうかは知らない。

ただ、橙は妖怪の山に住んでおり、藍と、その主人とは違う場所で暮しているのだけは事実だった。

それ故に、藍は橙が遊びに来る日を楽しみにしているのである。

「ようし、それじゃ行くぞ。今日はお稲荷さんだ」

そして、藍は橙をおぶって、どこぞへと姿を消した。

彼女達の家がどこにあるのか、幻想郷の中でも知る者は少ない。

3・メリーさんの幻想郷縁起

「紫様が、どこに住んでるかって？」

阿求は、飲みかけのティーカップを机に置いてから、向かいに座る冴月に向けて言った。

八雲紫とは、阿求が「妖怪の賢者」と呼び、畏怖の念を持つ妖怪である。

現存する唯一の「スキマ妖怪」であり、強いのは確かだが、色々と謎がついてまわる存在でもある。

「うん。あの人、外の世界について詳しいんだよね」

「らしいね」

「ねえ、阿求ちゃん。あの人を倒したら連れてってくれるかな」

「連れてってくれる、って外の世界に？」

「うん」

冴月は曇り気のない声で言った。

そんな無邪気な友人に対して、阿求は

「いやあ。無理なんじゃないの？」

あの方が本気になれば幻想郷も潰せるという話もあるし、巫女とか霧雨魔理沙とかも相手にしたくないらしいし」

「もし勝ったら？」

「勝つても無理でしょ。それに、あの方の場合、行動の殆どが、幻想郷の秩序維持に繋がってるからね。」

人間の里の結界とか、外来人を神隠しにしたりとか、冥界と顕界の境界を曖昧にしたり……、まあこれは微妙か。

ともかく、わざわざ幻想郷の存在を外の世界の人間達に教えるような真似なんかしないと思うよ。隙についても幻想郷に強制送還されるのがオチじゃない？」

「ふーん」

冴月はそう言った後に、紅茶を口につけた。

やはり、稗田家の紅茶は絶品だ。

「で、結局、紫さんはどこに住んでるの？ 阿求ちゃん知らない？」

「さあ？ 巫女も知らないらしいし、あの方の場合存在その物が神出鬼没だからね」

「そつかあ。でも、外の世界に住んでるとか、そういう話もあるよ？」

「幻想郷縁起の脚注にも書いたけど、そういう可能性も十分考えられるって事。幻想郷では、人間を積極的に襲わないから、外の世界で襲ってるんじゃないか？ って話」

「結局、謎だらけって訳かあ」

「あの人の場合、人間から妖怪になった可能性も考えられるからね」

「魔法使いのように捨食の魔法を習得したんじゃないくて？」

「じゃなくて、境界を弄れば出来ないとは言い難いのが、八雲紫という名の妖怪。その気になれば過去にだって戻りそうだしね。紅魔館のメイドにだって出来ない事だけど」

阿求は、そこまで言うのと、すっかり温くなった紅茶を飲み干した。その時、阿求はふと思い出した物がある。

未解決資料の一つ。数百年前の御阿礼の子が拾った、外来人が書いたと思われるメモがあった。

「携帯電話」「GPS」「夢の世界」「大昔の日本」「タイムスリップ」「魂の構成物質の記憶」、そして「蓮子」。

先代からの記憶は、幻想郷縁起に関わる一部しか継承していない阿求にとっては全く意味不明の単語の羅列である。

だが、しかし…… 何か引つかかる内容だった。

- - - - -

少女祈禱中……

- - - - -

2XXX年。日本。

京都都内某大学、コンピュータルーム。

ここに並ぶパソコンの一台を、一人の女性が占拠していた。

モニターに浮かぶのは、紅い髪のメイド、無敵のシールドを張る戦闘機、そして空を飛ぶ巫女。黒い魔女。

「おつ。何、調べてるの？」

「うわっ。って何だ蓮子か」

「何だ、とは酷い言い草ね」

蓮子と呼ばれた女性は、モニターに食い入るように見ている。
辺りを埋め尽くす弾幕の数々は、蓮子にしてみれば、花火の様に
見えたからだ。

「それで？ 何、調べてるの？」

「うーん。国家機密かな？」

「それ嘘でしょ」

「ええ、嘘ですわ」

そう言っ、パソコンに向かっていた女性は、パソコンの電源を
落とす。

それを見届けた後、椅子を回転させて蓮子に身体を向けた。

「それより聞いて、蓮子。また、妖怪に襲われる夢を見たのよ」

「また？ そりゃ靈感の強い一家な事で。従姉妹は元気？」

「比良ちゃん？ 比良ちゃんは元気に巫女してるらしいわ。巫女っ
て何してるかは知らないけど、最近、エーリツヒ博士と知り合いに
なったらしいわ」

「エーリッヒって、あのサボテンエネルギーとかレッドストームとかのエネルギーを開発した人？ 巫女って結構顔が広いんだね」

「らしいね。比良ちゃん。昔、お姉さんの礼夢ちゃんが神隠しにあつて行方不明になったんだけど、それでも実家の桜崎家を継ぐって頑張ってるもの」

「目標がある人間は強いね」

「何やってるかはわかんないけど、結構、大変な仕事らしいわ。私は何をしてるかわかんないけど」

「本当に知らないのね、一応、親戚でしょ？」

「私には巫女の資格が無いってさ」

「まあ見るからにそうよねえ。気味の悪い眼してるし」

「それは蓮子も同じですわ」

「でも、こう言っちゃ不謹慎だけど、今のご時世、神隠しにあつて夢の世界に行つた方が幸せなのかもねえ」

「そうかもね。神隠しに遭う人は、破産した人とか、そういう人が多いみたいだし。誰かが起こしてるのか？」

「案外、神隠しを実行してるのは、一人だけかもよ？ もし神隠しを行つてる人物にとって、どんなメリットがあると思う？」

「そうねえ。神隠しに遭った人は、夢の世界へ行くのでしょうね。となると夢の世界の秩序維持のため？」

「あはははは。なるほど、そう来たか。それは面白い見解ね」

キンコンカンコン

「あつ。チャイム」

「そんじゃ私は行くわ。遅れて行くと岡崎教授が五月蠅いんだよ。そんじゃ、またねメリー」

「ええ、蓮子……。あつ、そっぴや昨日、夢の世界へ行った時に書いたメモ落としてきちゃった。まあいいか」

「風神想起」

0・阿求ちゃん

私は花屋の娘である。

今日は人間の里にある稗田の屋敷までやって来ていた。

この屋敷からは蓄音器からレコードの心地よい音楽がよく流れる。紅茶を御馳走になる為にここにやって来る事も多い。

最近はレコードも街の間でそれなりに流行している。

街の音楽ファンの間ではプリズムリバー樂團と二分する人気を誇る嗜好品だ。

稗田家の現当主は謎の音楽集団”么樂團”の遺した音楽をよく好んで聞いていた。

「阿求ちゃんたすけてー。このままだと妖怪に襲われるー」

そして私はこの家の現当主である稗田阿求ちゃんに助けを求めるべく、この屋敷にやって来たのであった。

「あら、妖怪退治の依頼なら稗田家は専門外ですよ。然るべき所へ相談したらどうかしら。貴女なら獣道でも抜けて博麗神社まで向かえるでしょう」

「違うのー。頭突きされちゃうのー」

「頭突きって事はまた寺小屋で宿題が出たの？」

「うん。遅れたら頭突きされちゃう……」

紅茶を嗜んでいる最中だった阿求ちゃんだが、私の願いに興味を持ってくれたようだ。

私は獣人の慧音先生がやってくれている寺小屋に通っている。授業はよく分からないけど、幻想郷の在り方については興味があるからそこそこ顔を出している。

私は阿求ちゃんも顔を出せばいいのと言った事はあるけど、大半の歴史は阿求ちゃんも知っているからと流された事もある。

そんな阿求ちゃんでも、ここ最近の幻想郷の歴史については興味を示す。

歴史は日々の積み重ねによって今この瞬間にも作られるのだ、って慧音先生が言ってた。

「それで宿題の内容って何？」

「ここ三年間の歴史をレポートとして記して来いって……とりあえず妖怪の山に出来た新しい神社の分を提出しなきゃいけないの」

「妖怪の山の新しい神社ねえ……前の幻想郷縁起を書いた後の出来事か」

「確かそうだったはずだよ」

阿求ちゃんは9代目の御阿礼の子だ。

御阿礼の子は『幻想郷縁起』という本を出版する事が使命らしい。前に第一巻が出て、それなりに話題になった。半年くらい発表が

遅れてた気がするけど、それは阿求ちゃんが悪い訳じゃない……はず。

私が見た所、『幻想郷縁起』とは妖怪のアピールと紹介がメインの本だった。

だが『幻想郷縁起』の第一巻が出てから、そろそろ四年もの歳月が過ぎようとしていた。

その後も幻想郷には様々な出来事が起こっていた。

未来の事は阿求ちゃんにも慧音先生にも分からない。

だからこそ振り返って統括するという事が大切なかもしれない。

「確かに三年という期間は大きな流れを生む事が多い。私も今年の妖怪寺の件で、あの山の神社の流れが一段落したように思う」

前回の『幻想郷縁起』が出た後も、幻想郷は様々な話題や異変があった。

妖怪の山に新しい神社がやって来た事。

吸血鬼がロケットを作って月まで飛んだはいいけど、月の人に負けて来たらしい事。

気質が斬られて天候が崩れる異変らしい異変もあった。

間欠泉が噴き出して、温泉が湧き出たらしい事。

地底から噴き出してきた妖怪が、宝船の遊覧船を作った事。

山の神様が巨大人形を作って河童と一緒にバザーを開いた事。

魔理沙ちゃんが弾幕解説本を出した事もあった。

これらは博麗神社の界隈で行われている事件が多い。

だが巫女は良くも悪くも視野が狭い。巫女が見ている物が幻想郷の全てではない。

里に住んでいる者にしか見えない物もあるはずだ、って慧音先生

が言ってた。

「ああ、そうそう。知ってる？ 阿求ちゃん。今度、妖怪のお寺さんが縁日を開くんだって」

「それは知らなかった。魔界への遊覧船も面白かったし、縁日も行ってみた」

妖怪のお寺さんとは、最近里の近くに出来た命蓮寺の事だ。

魔法のメツカと呼ばれる魔界行きの遊覧船もやっていて、里の間もその辺の妖怪も仲良く魔界の光景を楽しんだ。

お土産屋で買った魔界せんべいは美味しかった。

って違う違う。

私が稗田の屋敷に来たのは阿求ちゃんと遊覧宝船の話をする事じやなかった。

歴史について阿求ちゃんと纏めたかったのだ。

1・現在の歴史

「阿求ちゃん、それで歴史の事だけど……」

「まずは紅茶でも呑んで落ち着いて」

「そうだね」

阿求ちゃんが注いでくれた紅茶を嗜む。

とりあえずゆっくりしよう。まずはそれからだ。

すると阿求ちゃんが私に歴史の在り方について話してくれた。

「まず歴史と言っても、それほど難しく考える必要はない。歴史なんてものは本当はすごく曖昧だから」

「うん。人間は世代を重ねて早く死んじやうから歴史を忘れる。妖怪は好き勝手に歴史を捻じ曲げる。って慧音先生が言ってた」

「その人間が作る歴史も実は主観に満ちているんだけどね。どっちにしる歴史というのは立場や視点によって大きく意味が変わる。それを踏まえると……」

「踏まえる？」

「要するに歴史は観測する人によって変わる。その中で説得力のある歴史だけが生き残る」

「説得力かー。そんなものなんだ」

「あるいは歴史も解釈によって評価は変わるんだけどね。だから本当は歴史というのは意味を成さない。少なくとも幻想郷においてはね」

そう、慧音先生も言っているが幻想郷の人間にとって歴史を必要としている人間はそう多くない。

例えば阿求ちゃんの『幻想郷縁起』も昔はもつと真面目な本だったが、今はそれほど重苦しい本とは言い難い。

妖怪も別に幻想郷を支配してやるぞーという物は、まあそんなに多くない……はず。

「でも今の幻想郷の歴史はどう評価されるか分からない」

「それはどういう事？ 阿求ちゃん」

「山に新しい神社が出来た事や、地底の封印が解けた事。妖怪のお寺が出来た事も……好意的にも悪意的にも取れるという事」

「なんとなく言いたいことは分かるような分からないような……」

「例えば私の幻想郷縁起。これも人によって面白いと思ってくれる事もあれば、真実じゃないから認められないとする意見もありました」

「捻くれてるねー。もつと軽く見ればいいのに」

「色んな人が居るという事ですよ」

「私は阿求ちゃんの幻想郷縁起は好きだけどなー」

「ありがとう。要するに歴史を記すなんて事も単なる感想文でしかない。ここ三年間で起きた出来事の感想を書けばいい……かもしれない」

最後の”かもしれない”が私の不安を煽る。

だが阿求ちゃんの言いたいことは大体分かった。

私も歴史を作ろうと思えば作れるのだ。それがどう受け入れられるかは人によるかもしれない。

しかし、私は歴史を作りたい訳ではない。最近の歴史を纏めたいだけなのだ。

「ふうん。慧音先生はそれでいいのかな」

「多分いいと思う。例えばあの獣人は今の博麗の巫女にあまり良い印象を抱いていないでしょう」

「霊夢ちゃんもあんまり里と交流しないからねー。買い物には来るけど」

「でも彼女が首を突っ込んで起きた事も人によって色んな解釈が出来る。幻想郷や人間の里の益になる事も行ってるかもしれないしね」

「だから私達に歴史を聞いてみたい？」

「そうだと思う。だから難しく考える必要はないかな。山に新しい神社が来てから、妖怪寺が里の近くに立つまでの事を想起するだけでいい。それもまた歴史だから」

「そっか」

上手く乗せられた気もするが、最近の歴史を考えるとというのは各々の歴史解釈をすれば良いと阿求ちゃんは言いたいのだろう。

その為にも一つ一つの出来事を想起してから、それらを繋げていこう。

今思い返すことで何か見える事もあるかもしれない。

2・神様

「そう言えば阿求ちゃん、幻想郷縁起には神様の事が載ってなかった

たよ」

「元々、幻想郷縁起は人間の為に妖怪の対策を記した書籍だったから、人間の味方である神様についてはそれほど記す必要はないかなと思ってたけど……」

「そう言えばお寺さんの人達は神様も妖怪も同じだって言ってたから訳わかんなくなっちゃった」

「どっちも精神的な存在である事は変わらないかな。ただ人間に味方する事が多いのが神様、人間を襲うのが妖怪」

「まあ色んな神様が里にも味方してくれているのも確かだもんね。秋姉妹とか」

「うーん……次の幻想郷縁起には妖怪だけじゃなくて神様についても詳細に記した方がいいのかな」

幻想郷には人間と妖怪だけでなく神様も存在している。
決して山で起きたゴタゴタによって生まれた訳ではない。
例えば秋の収穫祭では、豊穰の神様をお呼びしたりする。
冬が長引いた異変の時も、豊穰神様が頑張ってくれた。

「しかし外の世界ではもう神様は信仰されていないのかな」

「なんかカルト宗教ってのが流行ってるせいか商売上がったらしいよ、阿求ちゃん」

「商売仇というよりは偽物の神様という事かな。よくわからないけど……」

外の世界については、よく分らない。

ただカルト宗教なる概念は、信仰とは別なのかもしれない。

とりあえず幻想郷では神様はちゃんと存在しているし、人間に味方をしてくれる神様も数多い。

秋姉妹の例が顕著だろう。お祭りを開くことで農作物もちゃんと取れる。

今の幻想郷は昔に比べてずっと豊かだ。

人間は神様を信仰し、神様は人間に力を貸してくれる。それは対価交換である。

逆に言えば外の世界ではその対価交換が成立していないという事なのかもしれない。

勿論、秋姉妹の事は一例であり、他にも色んな神様が味方してくれている。

「霊夢ちゃんは意識してなかったけどあの子は平等に叩きのめすからねー」

「そもそも今の巫女は人間も妖怪も神様も区別してなさそう。自分の神社の神様についても知らない節があるし」

「ねえ阿求ちゃん。博麗神社に神様なんて居たの？」

「居る。でもそれは別にいいや」

霊夢ちゃんが見ている幻想郷は、また私達と違って見えるのだろ
う。

だが、それも幻想郷の一つの解釈でしかない。

霊夢ちゃんが敵だと思ってる存在も、街に住む私達にとっては味

方だという事も有りえる。

というか幻想郷なんてそんなもんだ。

精神的な存在である妖怪は、ありとあらゆる概念を真実とするのである。

例えば山に住む河童は、天狗の部下ではある一方で人間にとっても盟友である。

阿求ちゃんの蓄音器が壊れた時に修理してくれるのも街に派遣されて来た河童だ。

最近でも人間と河童のハーフの子が引き起こした問題で色々あったが、それについては今は置いておこう。

今は山に出来た新しい神社について考えたい。

3・守矢神社と分社

「それはさておいて山の神社の話だね」

「天狗や河童、しまいには博麗の巫女まで巻き込んで色々とゴタゴタがあったらしい。結局は和解したみたいだけど」

異変……と言っているのか分からないけど、とりあえず何かしら抗争があったらしい。

全て酒に流して終わったというソースは文々。新聞だが、あの新聞も博麗神社界隈の情報を知るには役に立つ。

一つの主観だけが正しいとも限らないから、色んな意見を踏まえた上で自分で考える事が大事なのだ。

勿論、阿求ちゃんの幻想郷縁起も視点として踏まえておきたいと

私は思う。

文々。新聞や魔理沙ちゃんの魔道書も面白いけど、幻想郷縁起の方が情報は纏まってると思います。

それもまた私の解釈でしかないけど、まあ阿求ちゃんが非戦闘員つてのも確かだしね。でも非戦闘員じゃなきゃ見えない物もある。

……ああ、また思考が脇道へ逸れちゃった。今はあの山に出来た神社の話だ。

「ああ、それであの神社……の名前ってなんだっけ、阿求ちゃん」

「守矢神社」

「そうそう、その守矢神社は幻想郷にどんな影響を与えたのかな」

「まず博麗神社に分社が出来た」

「あの鳥小屋だね」

「そう、あの鳥小屋」

どうも博麗神社（というか霊夢ちゃん）と守矢神社の協議の結果、守矢神社の分社を博麗神社に作ることで手を打ったようだ。

分社とは言うものの単なる鳥小屋にしか見えない。

恐らく霊夢ちゃんの嫌がらせだろう。

「でも阿求ちゃん。分社って有りなの？」

「神様は分霊になるから分社を信仰しても神様の徳になるね」

「いやそうじゃなくて、博麗神社の信仰を奪われやしないかって事

よ」

「うーん。信仰は零より減る事はないからね。守矢神社の分社を信仰すれば同時に博麗神社もついでに信仰する事になるしね」

「つまり守矢神社のおかげで博麗神社のお賽銭がほんの少しは集まっただけでいい？」

「そういう事になると思う。守矢神社の神様は風雨の守り神。同時に五穀豊穡の効能もあるし、ついでに武運の神でもあるから弾幕好きの加護にもなる」

「博麗神社の神様は何がなんだか分かんないからね。ただの酔っ払いのおじさんを祀ってるだけかもしれないし」

「結局、人間はメリットが分からないと神様を信仰なんてしないからね。守矢神社の分社のおかげで博麗神社へわざわざ向かうメリットが出来たのかも。ほんの少しだけ」

確かに守矢神社の分社が出来た事により、里から博麗神社へ向かう人も少しは増えた……気がする。

妖怪の山は天狗によって締め出された空間だが、まだ博麗神社へ行く事は可能だからだ。

ただし妖怪は出るし、何より距離もある。

というか参拝するのが面倒臭いのだ。それは博麗神社を信仰するメリットが分からないから。

霊夢ちゃんも巫女の癖して自分の神社のアピールポイントが分かっている節がある。

だから風雨の守り神かつ五穀豊穡の守矢神社の方が、博麗神社よ

り信仰が分かりやすい。

博麗神社より守矢神社の方が”神様を祀る神社”として正しい姿なのだろう。

むしろ博麗神社しか神社を知らない私からすれば守矢神社の在り方は新鮮でもある。

「幻想郷で信仰を集める足掛かりとして博麗神社と提携するのは悪くない選択肢だと思う。あんなでも一応、前まで幻想郷の唯一の神社だったし」

「でも阿求ちゃん。霊夢ちゃんは博麗神社を営業停止させられかけたって言ってたけど、守矢神社の神様からすれば意味ないんじゃない？」

「うーん。確かに好き好んで荒事を起こす必要もないしね。守矢神社の神様は最初から分社を設立するつもりだったのかもしれない」

「きつと早苗ちゃんが勝手に事を運ぼうとしたんだよ。なんか調子こいてそうな子だったし」

4・早苗ちゃん

守矢神社の巫女が東風谷早苗ちゃんだ。

巫女である以前に外来人に分類される。

外来人は妖怪に食われてると幻想郷縁起にはあつたが、早苗ちゃんみたいな子も確かに居る。

むしろ早苗ちゃんみたいな『力の強い人間』が積極的に取り込まれているという事でもある。

例えば慧音先生の友人の健康マニアの妹紅さん。
妹紅さんも過去に色々あったそうだが、今は竹林のお医者さんの
元に向かう際に道案内してくれたりする事もある。
竹林の屋敷と何か因縁があるのかどうかは知らない。

今の幻想郷は力の強い人間を恐れない。
だから早苗ちゃんのような力の強い人間が幻想郷にやって来る事
も不思議ではない。

外来人と言えど、決して幻想郷で生きていく事は無理ではないと
いう事だ。

というか里にも少数ながら外来人が暮らしてるケースが存在する
しね。

「神様の力を借りて戦うという点で言えば、霊夢ちゃんより早苗ち
ゃんの方が巫女っぽいね」

「2Pカラー」

「そう、ジャンプ力が高い代わりに滑りやすいの」

神様の力を借りて戦う巫女という点で言えば、恐らく早苗ちゃん
の戦闘スタイルの方が巫女としては正しい。

神社に祀られる神様を代弁する為に、お酒を呑んだり踊ったりお
酒を呑んで踊ったりするのが巫女だからだ。

逆に言えば霊夢ちゃんの戦闘スタイルは、霊夢ちゃんが持つ固有
の能力であって博麗の巫女である事と関わるとは限らない。

元々、博麗の巫女は血縁関係もへったくれもないらしいが、その
中でも霊夢ちゃんの出生は謎が多い。

どうも捨て子だという噂だ。その能力ゆえに外の世界から捨てられたのかもしれない。

人間はエゴで間引きをしたりする悪い者も決して少なくない。下手な人間より妖怪の方がずっと平和的なのだ。

どちらにせよ博麗の巫女としての能力と、霊夢ちゃん自身の能力は分かれてるように感じる。

この点も一子相伝の力を引き継いだ早苗ちゃんが、霊夢ちゃんと異なる所だろう。

「でも、もうちょっとマトモな巫女だと思ったけど霊夢ちゃんと大して変わらないのかなー」

「外の世界は文明が発達してるとも言うし、幻想郷は遅れてる世界のように見えてるのかも」

「信仰は零より減る事はないかー。麓の信仰を得られないのも自業自得じゃないのかな」

「紫様も言ってた事はある。確かに田舎は閉鎖的。だけど幻想郷は全てを受け入れる。都会の喧騒とは全てを受け入れる度量の広さも兼ね備えてる事」

「なんだ、この街も都会じゃん」

「そうかもしれない。妖怪が買い物にやって来るくらいには物資が豊富だしね」

5・エネルギー革命

「さて。都会と言えば山のエネルギー革命についても触れておいた方がいいと思う」

「なるほど。守矢神社が最近起こした出来事って事だね、阿求ちゃん」

守矢神社がやって来てから暫くした後の事だ。

突如、地底から間欠泉が吹き出ってしまったらしい。

どうやら噂によれば地底の妖怪鴉が八咫鳥へ進化し、人口の八咫鳥が放つ熱を有効活用してるという話だ。

山には間欠泉の地下センターが作られているらしい。

余談だが、この地底は鬼の国と同一世界であるとも言われている。

「遂に幻想郷も文明開化の波が来たねー」

「画期的なエネルギーが幻想郷にやって来たのも事実だしね。山の妖怪が里にも恩恵を分けてくれるかどうかは知らないけど」

「でも温泉は気持ちよかったよ」

「ああ、温泉は命の洗濯だよな」

守矢神社が起こしたエネルギー革命とやらで良かった事があれば、博麗神社の近くに温泉が出来た事だ。

やはり温泉は良い。日ごろ生きるのが辛いからこそ、一息つく事を忘れてはいけないのだ。

「でも地底は元から人間が妖怪を封印する場所だったから、紫様や山の天狗や河童も幻想郷は恨まれてないのかという不安があったん

だと思う」

「……みとりちゃんの事だね」

「うん。あの人妖の件こそが紫様に地底を封印させようと決めた件だったのかもしれない」

ただみとりちゃんの事件はスキマ妖怪さんが地底を警戒するだけの理由であつたと私は思う。

しかしみとりちゃんの事件について想起するには、時間が足りない。

私は何より慧音先生の頭突きを回避しなければいけないのだ。

「阿求ちゃん。人間が妖怪を封印する場所が地底で、人間が妖怪を棄てた場所が幻想郷なんでしょう？」

「過去の妖怪退治は人間に手の届かない場所へ棄てる事だつた。それが最も有効だつたし、今から見れば分かりづらいけど当時は妖怪も恐ろしい存在だつたから……」

「結局、地底も幻想郷もコンセプトは同じなのかな。外の間人間が勝手に棄てた物が集まる世界」

「なるほど。そういう考え方もあるのね」

「阿求ちゃん？」

「……いやなんでもない」

どうも阿求ちゃんは、過去の象徴たる地底に対して何か思う所が

あつたようだ。

御阿礼の子として転生を続けてきた阿求ちゃんから見れば、過去と現在の違いについては私以上に実感する事があるのだろう。

現在の幻想郷の妖怪は、基本的に人間と仲が良い。

人間と妖怪の全く新しい関係。

それが良いか悪いかは人によるのだろう。

だが阿求ちゃんはそれが悪い事だとは思っていないと私は解釈している。

幻想郷縁起の最後に記された独白に阿求ちゃんが込めた思いは、恐らく私なんかが思ってるよりもずっと深い意味があるのだろう。

「どちらにせよ地底の妖怪にも色々居るからね。遊覧宝船の船長とかも地底出身らしいし」

「阿求ちゃん、それって地底の妖怪にも可哀相な子も居るって事だよね」

「そう。命蓮寺の主張はそういう物だし、人妖河童の件も踏まえても領ける話かもしれない」

「結局、地底の封印が解けたのは別に悪い事でもなんでもないじゃん。仲良くやればいいのに」

「これからの幻想郷が地底とどうなるのかは分からないけどそれこそ仲良くやっていく可能性も考えられるかな。地底の話はこれだけで終わりそうにないからね」

「楽しみ楽しみ」

結論から言えば、鬼の国である地底との関係はまだどうなるか分からない。

だが決して無視出来ない変化だろう。生きるという事は変わるといふ事である。

これは私見だがなんとなく全部上手く転がってしまうのではないかな。

だって幻想郷だしね。

6・命蓮寺

「後は里の近くに出来た妖怪寺かな。あの寺が出来た時の反応には今更ながらビックリした」

「あー、宝船が降りてきてお寺さんになったんだよね」

「いや、宝船が寺に変形した云々よりも、里の人達の反応に驚いた。縁起がいいとか偉いお坊さんが居るとかそんな反応ばっかだったから」

「縁起が良かったじゃないの。妖怪に慕われる偉いお坊さんも居たじゃないの」

「うん。だから今の人間は強いなと思った」

阿求ちゃんが何を言いたいのか私には分からない。

それは御阿礼の子が過去の記憶をぼんやりと受け継いでいる事と何か関係あるのかもしれない。

一つ言える事は命蓮寺の人達が里の人間にとって恐れるべき存在

かというと、そうでもなかったという事。

魔界への遊覧船を運営してくれたり縁日を開いてくれたり楽しいイベントも多い。しかも里の近くでやってくれてるし。

仏教徒だから肉食を禁じてるのも安心要素かもしれない。

「あの妖怪寺の出現は幻想郷のパワーバランスに影響を及ぼすかもしれない」

「阿求ちゃん。それって悪い方向の話？」

「いや恐らく良い話。というのもパワーバランスが崩れかける危険性は守矢神社の台頭によるもの」

「守矢神社が？」

「そう、あの神社の顧客は山に住む河童や天狗だからねー。そうして妖怪の山の勢力が強まれば、麓の里や妖怪とのバランスが崩れかねない危険性もあった」

「そこで命蓮寺だね」

「うん。あの妖怪寺は人間と妖怪の平等思想を説いてる。それは妖怪にも人間にも味方してくれる可能性があるという事」

「悪い人には見えないからね」

「嘘をついてるようにも見えない」

「じゃあ山は守矢神社を信仰して、麓は命蓮寺を信仰すればいいって事だね。阿求ちゃん」

「何を信仰するかは各々だと思っけどそうなると思う」

守矢神社の台頭による最大の懸念とは何だったか。

それは妖怪の山に住む河童や天狗が勢力を増す事によるパワーバランスの崩壊だと言われていた。

妖怪の山は隔絶されているし、人間はおろか麓の妖怪とも接点をあまり持たないのが山の妖怪だ。

だからこそ守矢神社によって山が強くなりすぎるのは不安要素だったが、逆に麓も命蓮寺によってバランスが取り戻したという事だろう。

それでいいのだと思う。天狗も荒事は好まないだろう、多分。

「で、守矢神社が麓での営業に商売仇が出た云々は巫女2匹の自業自得って事でいいのかな。阿求ちゃん」

「それでいいと思う。今までいくらでも里まで営業する時間はあったのに来なかったし」

7・神は恵みの雨を降らす Sylphid Dream

ともあれ山に出来た神社…守矢神社の考察は概ね終わった。

後は思考の後片づけを残すのみ。

「幻想郷は全てを受け入れると紫様が仰られてた事を思い出すね。それはそれは残酷な事だとも」

「残酷かなー。地底の妖怪も命蓮寺の妖怪もいい奴らに見えるけど

ね」

「紫様も古い妖怪ですから」

「そんな事を言ってもいいの？ 阿求ちゃん」

「紫様もその辺の自覚はあるでしょう。新たな流れを残酷と意味つとも年を食うという事は新しい事を認めづらくなる。それは仕方ない事」

「ふーん」

「守矢神社の台頭は紫様の意図とは無関係らしい。でも紫様は守矢神社を幻想郷から追い出したりしないでしょう？」

「あー、そうだね」

結局、何も不安要素はなかった。悲観的にならない方がいいね。山の新しい神社の台頭によって起きた流れは静かに閉じていく。幻想郷に残されるのは新たな喧騒のみ。

「守矢神社の台頭、地底世界との交流、そして命蓮寺。これら三つを軸にして考えた方がいいのかな」

「その三つの事件が主軸だね。後は夏の異常気象とか吸血鬼がロケツト作った件とかもあるけど」

「ゆっくり一つずつ解釈していく必要があるんだね。阿求ちゃん」

「そう。どれも幻想郷ないし幻想郷の周辺地域で起こってる異変だ

から。本当はそれらを統括するのが幻想郷縁起なんだけどね」

「いいってば。阿求ちゃんは幻想郷縁起を描き続けてもいいし、描くのを止めてもいい。気が向いたら描けばいいと思うよ」

「ありがとう。そう意見を出してもらえると助かる」

阿求ちゃんは次の幻想郷縁起を描くかどうか迷っている。

今の人間と妖怪は仲が良い。だから幻想郷縁起を描く必要がないかもしれないという。

私はどっちでも良いと思う。

阿求ちゃんに描く気がないなら描かなくてもいい。

でも阿求ちゃんが描きたければ、その時は新たな幻想郷縁起を真っ先に読みたいと思っている。

もはや幻想郷縁起も嗜好品のような物なのだ。

阿求ちゃんが幺楽団のレコードを聴きながら紅茶を嗜むのと同じようなもの。

「結局、守矢神社が来た事によって起こった事は巫女が増えたっただけかな。阿求ちゃん」

「そう考えても良いと思う」

ま、その程度の話だったんだよ。

何も難しい事なんてない。

人間も妖怪も神様も、どの生きものも現在を生きなければいけないのだ。

それが地上で生きる者の運命だが、悲観的にならない方がいいね。むしろ近況を振り返る事によって現状を把握する事も、上手く生きていくには大切なのだ。

そう纏めた私は、空になった紅茶のカップをテーブルに置いて立ち上がる。

「じゃあ考えも大分纏まったからそろそろおいとまさせて頂くね。今日は楽しかったよ、阿求ちゃん」

「ええ。いつでもどうぞ。冴月」

8・花屋の娘

私は花屋の娘である。

名前は冴月麟。

人間の里に住む獣人です。

私、この街が好きです。

「弾幕嫌いの先代巫女」

人間の里。

幻想郷の拠点の一角であるこの場所は、その名の通り住人の多くが人間である。

人間を捕食する妖怪にとっては格好の餌場である……はずだった。だが外の世界から見たこの郷の「常識」は、間違いなく斜め上の方向へぶっ飛んでいる。

例えばここに哀れな忘れ傘が変化したからかさお化けの妖怪少女が居る。

彼女は人の心を食べるタイプの妖怪だ。

もし幻想郷の人間が妖怪を恐れるような人間ばかりであれば彼女はいつでも満腹なはずだ。

しかし、そうもいかないのが低レベル妖怪の悲しいサガである。

「うらめしや〜。お腹空いたから驚け〜。おねがいだから驚いて〜」

彼女の持つ紫色の傘は意志を持ったかのように大きな舌を出していた。

間違いなく普通の生物ではない。まがりなりにも妖怪なのだ。

しかし道行く人々はそんな存在を見ても何も驚愕の反応を示さない。

妖怪の存在が常識になった世界ではそんなもんである。

「うつ、ひもじい……」

からかさお化けは人間に囲まれながらも幻想郷にもヒエラルキー

がある。

だが低レベル妖怪は、ヒエラルキーの下に居るはずの妖精や人間よりも飢えている事が多々ある。

ならば人間を襲えばいいのだが、それをやるのは命取りだ。妖怪も楽じゃないのだ。

そんなからかさお化けを見かねたのか一人の女性が足を止めた。

「おや、からかさお化けね。お腹が空いたの？」

「うっ……うらめしやー」

「……驚かないわねえ。街の妖怪、みんなあなたみたいな芸のない子ばかりよ」

「ぐすん」

「そんなにお腹がすいたら……そうねえ。外から来た人間に襲いかかるのが手っ取り早いんじゃないの？」

さりげなく女性は外来人を犠牲にするような酷い事を言う。

だが妖怪が恐れられないのは幻想郷の常識のせいなのだ。

常識に囚われない外来人を襲うのは理に叶ってはいる。

だがそれで上手くいかないのも世の常だ。

「外から来た山の巫女に襲いかかったんだけど全力で退治されたの

……」

「最近は外来人も強いからねえ」

人間と妖怪の差は埋まっていない。

なのに妖怪はどこか生きづらい。

からかさお化けは空腹からキレたのか、こんな事を言い出す。

「ちくしょう！この街で暴れてやる！」

「それなら話が早いわ。当代の巫女と違って加減出来ないわよ、私」

そして数刻後。

「うつ……無常な……」

無残にも倒されたからかさお化けが転がっていた。

低レベル妖怪は飢えを満たすのもままならない。

めったな事で死ぬことがないのも妖怪だが、幻想郷では死にづらい存在ほど容赦してくれない。妖精とか。

輪廻を自覚する常識では死生観もまたちょっと特異的である。

一方、からかさお化けを叩きのめした女性は何事もなかったかのように街道を歩いていた。

「まだまだ巫女の実力は衰えてないみたいねえ。異変解決班は何やってるのかしら」

最近、幻想郷の女子の間で流行ってる”ルール”で叩きのめしてやった。

妖怪一匹を叩きのめすなら安いもんだ。

この女性の目的はお茶屋である。

茶葉が切れていて替えを買いに行こうとしていたのだ。

そしてお茶屋に辿り着いた時、女性は知人の紅白少女と出くわす。

「あら、霊夢じゃないの」

「げっ！」

この紅白は博麗霊夢。これでも巫女さんである。

霊夢はあからさまに嫌そうな顔をしていたが、女性はそれを気にせず世間話をするように語りかけた。

「ちゃんと仕事やってるかしら？」

普段は人里離れた山奥の神社で暮らしてるが、たまに里まで降りて来て買い物をしていくという。

「仕事？ちゃんとやってるわよ。妖怪退治とか妖怪退治とか妖怪退治とか」

「他の仕事は？」

「あー……やってるわよ」

博麗の巫女の主な仕事は妖怪退治だが、それだけが仕事ではない。それに幻想郷では以前に比べて最近は妖怪退治屋も増えた。

”ルール”の制限もあつてか霊夢にとって妖怪退治はほぼ遊び半分のゲームでしかないのかもしれない。

「私の時代に比べて霊夢は忙しそうで何よりだわ」

「あんたの娘が邪魔するからねえ」

「あら、あの子は道具屋を継がないから勘当したはずだけど？まだ巫女に未練があるのかしら」

「まあ幻想郷一駄目な妖怪が魔理沙の事を放置してるから、どうでもいいんじゃない？魔理沙だし」

女性は魔理沙という名を聞いて少し思う事があつたのか少し言葉を滞らせる。

それを知ってか知らずか霊夢は尚も言葉を発する。

「まっ、どうせ妖怪なんて大抵は悪い方なんだし、悪い方が必ず負けるもんよ。幻想郷の巫女も今は一人じゃないし、時代は変わって行くのよ」

霊夢はそう言いきる。

霊夢は迷いのない巫女だ。

その根底には妖怪という「敵」が居る事もある幻想郷の常識が大きいのだろう。

ただ妖怪も人間を襲う事を一種のカルマとして持ちえている。ここに妖怪退治屋と妖怪の奇妙な共存関係が成り立っていた。まあそれ以前に霊夢達は妖怪退治をゲーム扱いしてるのだが。

そんな霊夢の姿を見て、女性は少しだけクスリと笑った。少しだけ羨ましかつたのかもしれない。

「まあ私は博麗の巫女を引退したから、霊夢達の好きにすればいいわ。私は弾幕苦手だし」

そう、この女性は博麗の巫女を引退して今は隠居している先代の博麗の巫女であつた。

そして先代巫女の嫁ぎ先が里の大手道具屋「霧雨店」。

そして結婚した今でも幻想郷を見守ってるのである。

そんな先代に当代巫女は一言だけ「弾幕だから当たり判定小さいわよ」と言っただけだ。

「弾幕嫌いの先代巫女」（後書き）

先代巫女Ⅱ魔理沙の母親という脳内電波が浮かんで来た。
そうした家庭的な事情も今後は織り交ぜていきたいと思っています。

「先代巫女のゆく年くる年」(前書き)

2011年1月1日に執筆したSSを改題したものです。

「先代巫女のゆく年くる年」

ゆく年くる年。

幻想郷にも年末年始は存在する。

これを大切にするのは人間も妖怪も同じだ。

科学による事象の確定を是としない幻想郷において縁担ぎの存在意義は外の世界以上に色濃く残っている。

「先代さん。これはこんな感じでどうでい？」

「ああ、いいと思いますよ。後はそれをそこをお願いします」

「がつてん承知！」

里の道具屋である霧雨店。その店主の嫁が霧雨沙夜である。

人間の里でも年を越す為の祭りの準備をしていたのだ。

さりげなく妖怪が油を売ってる事があるので侮れない。

沙夜は霧雨家に嫁ぐ前は妖怪退治屋を営んでいた時があり、また当代の博麗の巫女があまり人間と接点を持たない事から今でも妖怪相手に駆りだされる事があるのだ。

例えばシヨバ代を払わずに出店を開く詐欺兎とか。

「カラーうさぎー。月から来たカラーぎよくとー。1円で買ってー」

迷いの竹林に住んでる妖怪兎が、どう見ても染料で染めた同胞を売ったりとかも風物詩だ。

最近は外来人に売りつけるのが関の山なせいか里ではあまり売れ

ない。

だがいつも居る妖怪兎の姿が見えなかった。

「あら、兎の長老さんは今日は里で商売しないのかしら」

沙夜の問いだした兎の長老とは因幡てゐの事である。

兎達の大ボスであり、実力は高くもないものの狡猾な性格は決して侮れない妖怪兎だ。

だがいつもなら兎を監督してるはずのてゐが里のカラーうさぎ売り場には居ないのだ。

そんな沙夜の疑問にカラーうさぎの売り子をしていた妖怪兎が答える。

「長老様、今年神社に行ってるー。だからちゐが人間達にうさぎ売ってるー」

「神社……？」

少し前まで幻想郷の神社といえば、沙夜にとっても馴染みの深い博麗神社だった。

しかし最近になって山にも神社が出来た。

だが兎の長老が山の神社にコネを持つてるとは考えにくい。となると考えられるのは一つだ。

「霊夢の神社に長老様いるー」

博麗神社である。

「へえ……霊夢も大変ねえ」

今の博麗神社で出店を開いた所で里の人間が行く訳がない。つまりてゐが博麗神社にカラーうさぎを売るのは妖怪相手の商売だ。

「でも妖怪相手の商売が成り立つのかしら……」

沙夜は少々首を捻っていた。

だがその時、突然とあらゆる物を吹き飛ばすような迷惑な突風が吹き荒れたのである。

これが天狗が引き起こす天狗風だ。

「号外よー。霊夢の神社が遂に妖怪に乗っ取られたわよー」

風の合間にそんな声が聞こえた気がした。

そして天狗風が過ぎ去った後に落ちている紙切れ。

そこには根も葉もない噂から嘘臭い真実まで執筆者の主観に満ちた天狗の新聞が落ちていた。

天狗が新聞を押しつける手段の一つである。

今までなら里に最も近い天狗が執筆した「文々。新聞」が多かったが、今は「花果子念報」が出てきた。

沙夜の元に里で天狗風を吹かせながら新聞を押しつけて行つたのも「花果子念報」である。

「なにになに？ 霊夢の神社が妖怪に乗っ取られた……？」

博麗神社が妖怪に乗っ取られたというのは里でもよく噂になっている事である。

だがその噂の出所は天狗の新聞だったりする。

天狗の新聞は下手な噂を流されると村八分になる危険性もある。そういう所が天狗の厄介な所だ。

しかし霊夢の神社が妖怪だらけな事も当然だ。なんせ霊夢は妖怪を本当の意味で退治しないからである。

だがそのおかげで今の幻想郷は過去に比べると多少は平穩になっているとも言えた。

「去年には妖怪寺も出来たし、幻想郷も変わっていくわねえ……」

博麗の巫女として一線を退いた沙夜ですら幻想郷の変化を肌で感じる。

それが良い事が悪い事かは分からない。

でも沙夜はどうせ同じ未来なら肯定的に信じてみたいと思うのだった。

「あ、カラーうさぎ一羽頂戴」

「あいー」

今日は兎鍋にしよう。

~~~~~

そんなこんなで師走も過ぎようとしていたのである。

里での大晦日祭りも一段落し、最近現れた宝船の妖怪寺からゴーン！という除夜の鐘が鳴り響いていた。

妖怪寺の素性はさておいても今まで幻想郷に寺が無かったので丁度良かったのかもしれない。

わざわざ妖怪祭が開かれてしまっている博麗神社に赴く物好きな人間もそう多くない。

それよりは里からそう遠くない妖怪寺で年越しを過ごそうと考える人間も少なくないようだ。

本来は除夜の鐘は欲を無くす修行用の代物らしいがあまり気にしない。

縁起がよけりゃいいのだ。こりゃめでてえやという事である。

霧雨店でも大晦日の大掃除を終わらせ、店主夫婦が一息ついている所だった。

この店には一人娘が居るのだが、彼女はとある事情で親子喧嘩してしまい勘当の身である。

とはいえ今はどうせ霊夢の神社を冷やかしに行っているのだろうが。

「あなた。今年も色々ありましたね」

「ああ、そうか」

霧雨夫婦も居間で年越し蕎麦を食べていた。  
年を取ると1年が経つのも早く感じる物だ。

沙夜は侘びしさを感じながら、窓の外から月を見上げてた。

「沙夜！これは一体どういう事ですか！？」

そんな霧雨家の居間にポンと音もなく仙人が現れ、なんの前触れもなく唐突に問いただしてきたのだった。

ちやぶ台に腰掛けて。

だが沙夜は仙人の襲来にも全く驚く事もなく、平常心のまま語りかける。

「あら、華仙様。今年もお世話になりました」

「ええ、数年ぶりです沙夜。それよりも博麗神社はどうなってるのです!？」

霧雨沙夜（旧姓：博麗沙夜）は元々神隠しにあい、天狗によつて妖怪の山で育てられた過去がある。

今は廃れた風習だが、博麗の巫女となる少女を神隠しにして育てるのは山の天狗の仕業だった。

と言つても天狗がそのまま「妖怪退治屋」を育て上げるのも問題がある。

そこで山に住む仙人が博麗の巫女教育係をやっていたのである。山が博麗の巫女を擁していたのは、外敵となり得る妖怪を退治させる為の私兵としてだ。

幻想郷の秩序が維持されてきたのはスキマ妖怪の暗躍に留まらず、妖怪の山の存在も欠かせない。

霧雨家に嫁いだ先代巫女の沙夜が未だに妖怪の山に住む仙人・茨歌仙と交流を持っているのもそうした過去の風習が関係している。

だがその山と博麗の関係も霊夢の代で途絶えつつある。

当代巫女の霊夢は色々と例外的な存在なのだ。

霊夢が持つ誰に対しても平等に見る性格は即ち誰とも仲間にならない物だ。

それは妖怪の山にも言える事であり、霊夢と妖怪の山の関係はあまり深くない。

ただ最近山に神社に居た風祝を擁立したり、霊夢に接触する天狗も出てきた。

そんなこんなで妖怪の山の在り方も変わりつつあるのだ。　言っても華仙はやや世俗から離れすぎてる気がしなくもないが仙人らしいと言えばらしい生き方だ。

それはともかく華仙である。

彼女はどこか生真面目な所があるが、どうも今の博麗神社の有りに何か意見があるらしい。

沙夜に思い浮かぶのは一つだ。

「妖怪祭ですか？」

そう、新聞にもあった神社の妖怪祭だ。

しかし華仙は首を横に振る。

「何故、地底の妖怪達が参加してるんですか！」

近年になって地底から間欠泉が噴出して、幻想郷との穴が開通したらしい。

そして地底の妖怪が噴き出しているのが現状だ。

沙夜も少なからず地底妖怪には警戒しているが、幻想郷妖怪と大して変わらないのではないかという気がしなくもない。

だが華仙は地底に警戒心を抱いてるようだ。

「地底の妖怪が妖怪祭に参加するのは妖怪だからだと思いますよ」

妖怪の祭だから妖怪なのだ。

霊夢からすれば幻想郷の妖怪だろうが地底の妖怪だろうが退治する対象なのだろうし。

だが華仙は地底という場所が気が気でならないようだ。

それは彼女の過去に起因するのかもしれないが沙夜は知らない。

そんな中、先ほどから黙々と蕎麦を食べていた霧雨家の店主が重い口を開く。

「仙人様。霊夢の奴は放っておいても大丈夫だと俺は思いますよ」

「ほう……それでその根拠は？」

華仙の問いに霧雨家の店主は口元でニヤリと笑って、こう言った。

「霊夢はね。人間だからですよ」

店主が笑った直後、除夜の鐘が鳴り響くと同時に博麗神社の方角がまばゆい光に包まれた。

「そ、そんな！地底の太陽が爆発した！？」

華仙は大げさに驚いていた。それだけ地底を警戒しているのだ。

一体、博麗神社で何が起こったのだろうか。

だが店主は暢気に蕎麦のおつゆをすすってから、なんの事もなく、  
つたように呟く。

「だから仙人様。あれが霊夢の妖怪退治でしょ。概ね妖怪祭に痺れを切らして大掃除を始めたって所でしょかね。本来、大掃除なん

てもんは年が明ける前にやっつくもんですがね」

そして店主はいっぱい酒を煽って一言。

「あけましておめでとう、仙人様」

それから

博麗神社の大掃除を見た妖怪寺の尼公は自身の在り方を再確認し、里の住人達は博麗神社になおも近づかなくなった。

では幻想郷と地底の関係を断ち切りたい茨歌仙はどうなるのだろうか？

「霊夢への説教は……来年に持ち越しそうね」

そう華仙は決心を固めるが華仙。

だが彼女もまた最近になって麓に姿を表す事が増えた人物の一人だ。

彼女が今年以降どんな目にあうのか。

沙夜はかつての師が辿る運命に少しだけ同情するのだった。

願わくば良き年になりますように。

## 「先代巫女のゆく年くる年」(後書き)

東方三月精　↳ Oriental Sacred Place .  
第12話「紅白信仰合戦」の別視点<sup>のつもり</sup>だったSS

白蓮に対抗した博麗神社の妖怪祭は向こうのネタ。  
妖怪に好かれやすい妖怪退治の巫女。

俺幻想郷における親父初登場。

まだキャラが固まってないけど、そういうのは作品を作って固めていけるかどうかだと思うので上手く行けば固まるかと。

僕はプロアマ問わずそういう「初期設定からの変遷」みたいなのが好きなんですよね。

霧雨家と霊夢は交流があるんじゃないかというイメージで書いてます。

親父さんの霊夢観はそれなりの繋がりがあるからですね。  
なんだかんだで僕の中で霊夢は孤児というかそんな感じ。

設定では博麗の巫女と妖怪の山は繋がってる。そんな感じですかね。

後、里の人間は結構強いイメージで描いてるのであしからず。  
むしろ里と山は幻想郷の二大勢力のイメージがあります。

2010年末期で最も東方で気になったのが「妖怪の山」の在り方だったり。

僕は山嫌いじゃないですよ。ブラックだろうけど。人食いで殺されるよりアル中毒で人を殺してそうだけど。

とりあえずあけましておめでとうございます。　茨歌仙どうなるんでしょうね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1348q/>

---

東方幻想人類

2011年1月16日07時59分発行